哲學研究　第百十六號

ディルタイの心理學的理念の基本的なるものに就いて

楢崎淺太郎

十七世紀以來發達したる數學的自然科學の範に則り、英國に於けるヒューム、ハートリーを先達とし、ヂェームス・ミル、ヂョーン・ステュアルト・ミルを經て、ハーヴアート・スペンサーに依つてその根柢の固められ、ヘルバルトを先驅とせるヴント學派によつて、その內容の略ぼ形成せられたる自然科學的心理學に對して、先づ反旗を飄し、進んで事實の心理學(Realpsychologie)或は說述的分析的心理學(beschreibende und zergliedernde Psychologie)或は精神組織の心理學(Strukturpsychologie)の建設に猛進し、現代に於ける精神科學的心理學の重要なる一局面をディルタイの開展し、岐路に迷ひし精神科學の進むべき正路を顯示せる(十二)一頁、ことは熟知の事柄である。近き將來の心理學の發展は恐らく、直接又は間接に、ディルタイの心理學に啓發せらるゝ所少くあるまいと思ふから、私は私の體認(verstehen)したる範圍に於て、氏の心理學の發生したる氏の

心理學的意識の生命として活躍せし心理學的理念の基本的なるものを叙述して、研究の一端といたしたい。

事實の心理學とは假定の上に假定を重ねて(Hypothesen auf Hypothesen)構成せられたる自然科學的心理學(七)一七五頁、に對して用ゐられたる名稱にして、氏がこの名稱を初めて發見せしは Novalis の研究中に於てである。ノヴァリスは Baader ist ein realer Psycholog und spricht die echte Psychologische Sprache. Reale psychologie ist vielleicht auch das für mich bestimmte Feld. と述べて、事實の心理學なる術語を使つて居る(十五)三〇六頁、デイルタイの心理學は、このノヴァリスの事實の心理學を核心として發表したものゝ樣である。又記述的分析的心理學とは、氏の心理學の方法的特徴より與へられたる名稱である。精神組織の心理學とは氏の心理學の基本對象又は中心對象を示さんがために名づけられたものである。Strukturpsychologie の譯語として、二、三年以來我國に於て使用せられ居るものは「構造心理學」であるが、私は構造よりも組織の方が、デイルタイの示さんとした眞意により近いと思ふから(十四)、Struktur を「精神組織」又は略して「組織」と譯述する。

一

氏の心理學的意識の理念を敍述せんとするに當つて、先づ最初に考慮すべきは、この敍述の果して可能なりや否やの問題である。敍述せんと試むるは既に敍述の可能の上に立脚せるものなりと雖も、なほ私にはこの點に對して大なる危懼がある。その一は、偉大なる思想家の理念を幼稚なる精神的組織の私の頭を以て、體認するこ

とが果して爲し得ることか。その二は、氏の生活したる十九世紀後半の獨逸の學界の雰圍氣は可なり複雜深刻である。かゝる複雜深刻なる雰圍氣内で發展したる偉大なる魂を、比較的に單一なる我國の學界、特に私の個性と環境とが作つて生活してゐた單一なる學界に成長した私が、果して之を把捉し得るや否や。その三は氏の意識の理念を體認するには、氏の著作の外に氏の日常の行動・談話・書翰等をも參照すべきであるが、まだ私にはかゝる方面にまで手が伸されてゐない。加之氏の著作についてすら私の漸く讀み得たものは、氏の全集の一卷の一部と、五・六の二卷の略ぼ全部とのみにして、二・三・四・七・八卷などは殆んど見てゐない。又氏に關する他の人の著作につきても、フリッシュアイゼンーケーラー(一)、トゥマルキン(二)、タッパー(十六)、勝部學士(三)等の三・四のものに止り、他の多くの有益なる著作を參照するの暇も持たない。かゝる有樣であるから、氏の心理學的意識の理念の敍述は、たとへ理論的には可能であるとするも、私にはその準備が極めて不完全であり、從つて今の私には殆んど不可能な問題に近い。唯氏の三・四の著作を通して私の觀た氏の理念の幾つかを數へ上げ、其性質を記述して見るに過ぎない。されば「氏の理念」と云ふも、ゲェーテの指摘した樣に「お前の會得する靈にこそ似てゐれ、おれには似てゐないのだ」とディルタイは微

笑するかも知れない。若しかくなりとせば、向後の勤勞に依つて、更に一歩を氏の眞の方に進めたい。

次ぎに私の敍述せんとするは、氏の理念の「基本的なるもの」であるが、この「基本的なるもの」の選定の標準は、彼・我の心理學的意識の標準に照して定めたるものではあるが、私の主觀的色彩が或は強いかも知れない。私の選定したる基本的なるものゝ一部につきては、氏も明にその「基本的なること」を言明してゐるが、其他の場合にありては、私の心理學的主觀の選定にかゝるものが多い。この點を豫めお斷りして置く。

二

氏の心理學的理念を體認せんがためには、先づ氏の學的意識の根源を流るゝ氏の信仰卽ち基本的假定を明覺しなくてはならない。氏は十九世紀の半ば、獨逸哲學破産の時代に於ける唯物的思想に反抗して、精神世界の獨立の存在を確信し、當時精神的なるものゝ自然化に對して、Mikrokosmosの獨立を固守してゐた伯林大學敎授ロッチエの見解に共鳴し、ロッチエの進みつゝあるが如き方向に於て、個々の科學の正して獨立、經驗的方法の基礎づけ、科學によつて失はれた情趣の滿足が復活せらるゝが

樣に感じてゐた(四)XVII頁。

然るに當時の學界の朝流及び事情は、ロッチェの固守しつゝあるが如き方向とは、正反對であつた。卽ち氏が哲學の研究に這入つた頃は、ヘイゲルの哲學が自然科學の勢力のために破碎せられ、自然科學的精神が哲學的精神となり、この自然科學的精神は、精神(Geist)を自然の產物と見做し、かくして遂にこの時代の哲學的精神は、精神を殺害し、精神世界の存在を拒否してゐた。ディルタイはこの有樣を er verstümmelte ihn 又は er die geistige Welt verstümmelte と記述した居る(五)三頁。(以ふまでもなく、この er はその時代の哲學的精神にして、ihn は精神である)。氏はこの時代の哲學的精神が、精神を殺害せるの暴力に對しては、極度に憤激せるものゝ如く、この verstümmelte なる語を、上の語を發したる時より二十八年前に出版したる「精神科學の序論」中にも既に使用して居る(四)XVII頁。

當時の學界の事情がかくの如き有樣であつたから、精神世界の獨立の存在を確信せる人々は如何にかして、かゝる學界の潮流に對向せんと焦心し、ある學派は神學的世界觀を人爲的に再興して之に當らんと試みたが、かゝる運動は氏の到底堪へざる所であつた(war mir unerträglich)。加之この神學的世界觀は單なる假定に基づくので

あるから、かゝる假定を其出發點となすことに對しては氏は反感をすら懷いてゐた(war mir antipatisch)。又十八世紀頃より漸く形而上學より開放せられたる廣義の歷史學派(die historische Schule)は、この精神世界の復活運動に對して、その中心的勢力として活躍すべき使命を有するものなるにも關らず、この歷史學派の研究には、意識の事實の分析の研究を缺ぎ、從つて確實なる知識に基づく斯學の基礎づけが爲されてゐない。之を以て歷史學派の研究が、獨立せる一個の精神科學となることも出來なければ、又生活に對してある影響を與へることもできない狀態にあつた。

かくの如き有樣で、十八・九世紀は精神科學の基礎の不確實なる時代であつた。之を以て研究者のある者は、事實の單なる記述に從事し、又他の者は殺害せられたる精神を主觀的に精神化して自ら慰め、或は再び形而上學の懷に歸らんとし、更に他の者、例へば Comte, St. Mill, Buckle 等は、歷史の謎をば自然科學的原理と方法とを移し來つて解決せんと試みるに至つた(四)XVI頁。この歷史的實在への、自然科學概念と方法との適用は、遂に歷史的實在を殺害するが如くに、ディルタイは感じた(die……schien mir die geschichtliche Wirklichkeit zu verstümmeln,……)(四)XVII頁。

學界のかゝる諸種の情勢に憤激したるディルタイは遂に立つて、精神世界の獨立

の存在を保證すべき精神科學建設の大願を誓ふに至つた。後年に於ける氏の心理學的理念も、この大願を果すための一努力として動き出でたるものである。氏の精神科學建設のこの大理念はかくの如くして起つたのであるが、この理念に油を注ぎ、血を與へたるは、科學の任務に對する氏の根本的理念である。氏は希臘哲學のある時期に於て、發現したる「科學を以て科學自身のため」なりとなす思想に强く反對し、精神科學の終局の目的は生命發達の事實上の指導を爲し得る點にありと確信したゐた(die anderen Geisteswissenschaften, welche das Leben leiten sollen)(六)六九頁。氏が精神科學の建設就中特にその基礎づけに生涯の全精力を傾注したのは、當時の學界の情勢に對する氏の憤激と精神科學の社會的任務に對する氏特有の理念に發したものゝ如くである。

三

ディルタイの極力擁護せんと試みたる精神世界は、氏の見解によれば、生動せる生命(Leben)の直接の表現であるから、精神世界を明確ならしめんとする精神科學は、この生動せる生命を可能の限りに於て明白ならしめなくてはならない。この生命を

明白ならしむること（dieses Leben sehend zu machen(一)三五頁が、氏の生涯の直接の學的勤勞であり、學的理念である。而してこの勤勞は、ヘーゲルの初めて企てたる大事業の繼續であつた。この生命の泉に接近せんとするの理念は、ゲェーテ以來の理念であり、特にゲェーテに於ては、氏の全活動の根柢をなす理念である。ゲェーテはファウストに語らしめて云ふ。

Man sehnt sich nach des Lebens Büchen, Ach! nach des Lebens Quelle hin.（八）三四頁。

（あゝ。生の小川へ、生の元の泉へと、此心があこがれるなあ。）（森林太郎氏譯）

ディルタイはこの生命の泉、生命の本質に、科學的に接近せんと努力した。されば既にマックス・フリッシュー・アイゼンケーラーの指摘したるが如くに（一）三三頁、ディルタイに於て「生命」なる語ほどの最重要の意義と任務とを有する術語は、外に見出すことができない。生命、體驗、生命感情、生命關聯、生命の謎、生命經驗等の語は、氏の著作の至る所に散見して、學的意識の出發點、關係點、復歸點となつて居る。されば氏の生命の理念の如何なるものなるかを見定めて置くの要がある。

氏は生命の特徵を述ぶるに、教養ある女性が自己の體驗を物語るが如くに、常に生命の一相のみを示し、一括してその全相を一時に示してゐない。されば氏の著作の

諸所に散見せる生命の各相を蒐集して、生命の一般特徴を記述して見る。

生命は體驗の内に、常に一つの關聯(der Zusammenhang)として與へられて居る(七)一四四頁。更に語を換へ、生命は生命其者として體驗に與へられて居る(七)一五二頁。この生命の要素を構成せるものは意志・奮鬪・勞作・要求・滿足等にして、生命は是等のものゝ内に存在して居る(Hier ist das Leben selber)(十)一三一頁。氏の生命に關するこの二・三の表現に於ても既に推定し得らるゝが如くに、氏の生命は生動せる一種の活動である。夫故に氏は他の著作に於て、生命は不可抗の前進力なり(Das Leben selbst lässt uns erst allmählich einigermassen erraten, von welchen Kräften es unanfhaltsam vorwärts getrieben wird)(七)二〇五頁と論定して居る。かくの如くに生命は一つの生動體なるを以て、生命は生命の生活せる環境によつて規定せらるゝと共に、他方又環境への反動をも起し(七)二〇〇頁、從つて外界と相關作用を營む(七)二一二頁。されば生命は力又は一種の作用(Wirkung)にして、生命の本質はこれ等の作用の關聯(Wirkungszusammenhang)と云ふを得ぐく、精神生活の全體はこの内に活動する。氏はこの意味を次ぎの如くに述べて居る。

Leben ist der Wirkungszusammenhang, der zwischen den Selbst und seinem Milieu besteht. In diesem Wirkungszusammenhang ist die Totalität des Seelenlebens in der Folge der Gemütszustände (das

Wort als 〈Ausdruck für〉 Totalität genommen) wirksam. (十一)三〇四頁。

生命は作用並に作用の關聯であるが、この作用の關聯の向ふ對象は生命價値(Lebenswerte)にして、作用の關聯はこの生命價値を發展せしめ、固定せしめ且つ昂進せしめんとする傾向を有し、一言以て掩はゞ生命は生命價値の合目的增進をその使命とす(七)二一七頁。 而して生命の最高の作用は意志の內的活動によつて一切を支配するにある。 卽ち曰はく、Nun ist die Lebenseinheit nicht mehr dem Spiel der Reize preisgegeben. Sie hemmt und beherrscht die Reaktionen, sie wählt aus, wo sie eine Anpassung der Wirklichkeit an ihr Bedürfnis herbeiführen kann. Und was das Höchste ist: wo sie diese Wirklichkeit nicht zu bestimmen vermag, da passt sie ihr die eignen Lebensprozesse an und beherrscht die unbändigen Leidenschaften und das Spiel der Vorstellungen durch die innere Tätigkeit des Willens. Das ist das Leben. (七)二一二頁。

されば この作用の關聯が、自然の因果關聯(Kausalzusammenhang der Natur)と異る所は、價値を確定し、目的を定め、之を實現せんとするにある。 この作用の關聯は個人と自然、個人と文化、個人と個人との交涉によつて成立し、歷史の世界を形成する。 歷史は作用の關聯(Zusammenhang von Leistungen)の內に生れ、歷史生活はこの作用の關聯の反射である(一)四七頁。 而して各個人はこの作用の關係の組織の交叉點にある。

生命は作用なるも、この作用は直接に意識に上昇するものではない(五)五頁。生命の體認の至難なるの一はこの點にある。又この生命を分析するも、物體的又は實體的なるもの無く、又分離して孤立になし得るが如き要素も發見する能はず。要素は作用と不可分じある(diese sind überall untrennbar von den Funktionen.)(七)一九六頁。されば生命を要素より構成することは勿論出來ない。各種の心的なるものゝ系列は精神生活の精神組織(Struktur)を中心として、結合せられ全一體を構成して居る。この全一體卽生命である(Dieses Ganze ist das Leben.)(七)二〇〇頁。されば心的生命過程は其幼稚なるものより、最高の形式に至るまで、常に統一體にして、部分又は要素より構成せられたるものにあらず(七)二〇〇頁。生命は直接に體驗內に生き生きとして働いて居るから、生動性(Lebendigkeit)を一特徵となす。次ぎに生命の多樣とその深さとは歷史の內に發見せられ(五)四頁、生命は歷史の內に發展するから、生命の他の特徵は歷史性(Geschichtlichkeit)にある(七)一九六、一八〇頁。生命は一定時に於て橫に擴張(erstrecken)せらるゝと共に、他方にありては時間の經過と共に縱の方向に擴大せられる。之を發達と云ふ。されば發達は、生命の顯著なる他の一特性である(七)一九六、二一三頁。發達中に生命の廣大なる關聯が形成せられる。其他に氏が生命の特徵として記述せるものは、自由性(Freiheit)

(七)一九六頁。及び連續性(Kontinuität)(七)二〇一頁である。

氏の生命に對する理念は大略上に述べた通りであるが、氏の生命に關する理念中、認識論的見地より見て極めて重要なるは、生命と思惟との關係に關する理念である。デカルトをその起源とせる合理論者は理性を以て宇宙の最高原理となし、人間性の一面を高潮して、他の諸面を殺害し、生命は思惟によつて把捉し得るものとなした。然るにディルタイは之等の合理論者の一面觀、就中既にクリューゲルの指摘したるが如くに(十二)一頁、カントの認識論の自然科學的、數學的一面觀を征服して、眞實在卽ち生命の全體中に於ける思惟の正しき地位を規定した。

氏によれば眞の實在又は實在の核心は思惟關聯(Denkzusammenhang)にあらずして、生命關聯(Lebenszusammenhang)である。この事實を氏は次ぎの如くに簡明に記述して居る。

Er ist das Leben, das vor allem Erkennen da ist. (七)一九六頁。

されば氏によれば生命は思惟の條件にして、思惟は生命の發動の一形式である。生命關聯は思惟關聯を抱攝するも、思惟關聯は生命關聯を抱攝する能はず、思惟は生命の流の一定所に定位せしむべきものである。この生命は思惟感情意志の條件に

して、思惟の內にも生動し、思惟によつて汲み盡す能はざる內的經驗である。この生命なる內的經驗は科學・哲學・藝術を作り出す原動力にして、この生命を科學・哲學・藝術によつて產み出すことはできない。唯、科學・哲學・藝術は生命にある影響を與へ得るのみである。

ディルタイの生命と思惟との關係の此理念より、生命の體認に對する思惟の力に必然的の限定が與へられ、生命は思惟によつて把捉し能はざるものとなる。氏は生命と思惟との關係の上の理念の下に、生命の認識の方法論の攻究に於て、時間を以て單なる現象と爲し、從つて又生命其者も現象に過ぎずと爲すカントの學說(カントの學說をかくの如く解するの當否につきては勿論問題があらうが)を批判して、次ぎの、Hinter das Leben kann das Denken nicht zurückgehen. [思惟は生命の背後にまで復歸する能はず]なる結論に到達した(五)五頁。　氏はこの結論を精神科學の認識論の第一理念となし、この理念の下に、精神科學の新なる認識論建設の素地を拓いた。氏はこの斷定ほど哲學序論の講義に於て、强力に活躍したものは他にないと七十九歲の絕筆に於て告白して居る(五)五頁。　この斷定は一八八三年の著作に於て既に明白に現はれ、經驗の妥當は意識の條件に基づき、經驗は意識の條件の下に現出するのであるから、

認識の眺めを眼其者の背後に轉向し能はざると等しく、認識の力は意識の條件の背後に進む能はずと述べ、之を氏の認識論の基本的立場として居る(四)XVII頁。　科學哲學(Wissenschaftsphilosophie)は思惟によつて、生命を抱攝し得るものなりとなし、嚴密なる學としての哲學の可能を前提とするが、ディルタイは之に反し、生命と思惟との關係の理念より、生命の背後に思惟の到達の不可能を論證して、遂に科學としての形而上學は不可能なりとの大斷定を下すに至つた。

タツパーは「思惟は生命の背後にまで復歸する能はず」なる斷定は、ロツチエの「人は思惟の背後に進む能はず」より變化せしものなりとして居る(十六)三四〇頁。

生命の體認に對して、思惟の力の微弱なるを認むるの理念の根源は、之をゲェーテに認むることができる。ゲェーテはメフイストフエレスをして「理窟ばかり考へてゐる奴は、外圍には牧草の茂つてゐる廣い野原のあるのに、草の無い原を、惡魔に取り附かれて圈なりに引き廻されてゐる獸の樣なものである」と語らしめ(八)四九頁、或は「一切の理論は灰いろで、綠なのは黃金なす生の木だ」と論定せしめて居る(八)五四頁。又メーテルリンクも「吾々自身を知るといふことは、最初は唯吾々の理性のみがする仕業の樣に思はれてゐたけれども、眞にこの知識に對して吾々の理性のあづかるところ

は果してどれだけの程度であらうか」(九)八二頁、と記して生命の體認に對する理性の力を限定せんとして居る。

四

生命は思惟によつて把捉し能はずとせば、如何にして之に接近すべきか。ディルタイはシュライエルマッヘル及び當時のロマンチック派のヘルデル、ハマン等の影響を受け「詩聖 Shakespeare, Cervantes, Geothe は、世界は精神世界より體認すべく、生命の理想はこの世界の土の上に建設すべきを吾人に敎ふる」と呼びて(五)四頁、生命を體認するに、體驗と全精神 (Erlebnis und Totalität der Seele) とを重じ、單なる思惟を認識の根柢となすカント學派に不滿を示し、氏特有の認識論的理念を發展せしむるに至つた。

生命體驗の根柢として體驗を重ずるの理念は、ディルタイ以前に於ては既に之をゲェーテに明白に認むることが出來る。氏は「戀した時にのみ戀の詩を作つた」と云ひ(十三)一五頁、氏が自分の詩について「それ等はすべて卽興詩 (Gelegenheitsgedichte) であり、それ等は皆現實によつて刺戟せられたもので、現實の中にその根柢がある」と自己の詩の源泉を說明し(十三)一四頁、更に氏は氏のあらゆる活動の根柢を次ぎの如き決定的な

語を以て「體驗に基づくことが常に私にとつて凡てゞあつた。空中樓閣は決して私のことではなかつた云々」(das Benutzen der Erlebnisse ist mir immer alles gewesen; das Erfinden ans der Luft war nie meine Sache,)(十三)一五頁と語つて、氏の一切の活動を體驗に基づくものとなして居る。

ディルタイはゲェーテと等しく生命の體認に於て體驗を重じ「ありのまゝの實在は吾人の內的經驗に與へられたる意識の事實の內に存してゐる。從つてこの意識の事實の分析が精神科學の中心となる」(四)XVIII頁、と斷定し、生命は體驗として與へられ、意識に現出する所のものにつきては何等の疑問を差し挾むの餘地がない。この內的經驗の確實性が精神科學の唯一の柱石で、茲に精神科學の知識となるものが與へられて居り、すべての哲學の出發點は茲にあると主張し、氏はこの主張を以て eine metaphysische Behauptung にあらずして、Realität der Innenerfahrung であるとした。かくして精神世界の原理の認識は、精神の世界その者の範圍內に於て可能であり、又之に基づきて精神科學が獨立の系統を構成することができる(四)XVIII頁。

かくの如くにディルタイは、體驗卽ち意識の直接の事實に一切の者の根柢、從つて學的根柢をも茲に見出したのであるが、學的根柢を概念又は假定に求めず、確乎たる

事實に之を見出さんとするの理念は、十八世紀の思想中より啓發せられたるものなるべく、この理念の確信は、ヘーゲル、ゲェーテ、シュライエルマッヘル等の歴史的・心理學的研究によつて得られ、固められたものゝ如くである。

體驗(Erlebnis)はディルタイの心理學の發足すべき根源的事實であるが、この體驗の理念が如何にしてディルタイにまで發展し來りたるか。この問題につき、私が今迄に於てディルタイの著作より得たる知識は極めて乏しいが、タッパーは之を次ぎの如くに解釋して居る(十六)。哲學史的知識の薄弱なる私には、タッパーの見解の正・否は解らないが、一種の解釋として參考のため記述して置く。

ディルタイの體驗なる術語は、獨逸の思索哲學の知的直觀(intellektuale Anschauung)から發生したものである。シュライエルマッヘルはこの知的直觀を感情(Gefuehl)に代へたが、ディルタイは之を體驗なる語にて置き換へた。而して氏はこの體驗による方法を宇宙の直觀(Anschauung des Universums)と定義した。シュライエルマッヘルは、この直觀を宗教中に、ヘルデルリンは詩の中に認めた。前者は宗教的天才の體驗より、後者は詩人の體驗から、一種の新なる汎神論的哲學を誘導した(Dilthey. Ges. Schr., Vol. IV, p. 53.)。而して兩者の直觀は思索哲學の知的直觀であつた。この哲學の重要なる規範は各の部分に對する全體の關係であつた。セエリングの哲學の系統は「部分は全體から體認せらる」(die Teile aus dem Ganzen verstanden werden)なるゲエーテの直觀の學說から發達したものである。シエリング及びヘーゲルの哲學系統は、カントの問題をゲエーテの世界觀(Weltansicht)によつて解決せんとしたものである(Dilthey. Ges. Schr., Vol. V, pp. 25 und 26.)。ディルタイはカントに對するゲエーテの直觀の關係

を明かにした。卽ちゲエーテはカントの Critique of Judgment から、「吾々は直覺的に、綜合的一般から、全體の直觀から、特殊に進む所の心、換言せば全體から部分に進む所のある心を想像し能ふ」なる句を引用して居る。しかしゲエーテはカントのこの暗示から直觀の方法を發展はさせなかつた。彼は彼の內的傾向より、夙に之を採用し、之に從ひ、彼の天稟に基づきて、直觀と概念との間に正しき平衡を保つてゐた(Siebeck, Goethe als Denker, 1905. pp. 17ff.)。ゲエーテ以前にありては、ヴインケルマン、ヘルデルが藝術の本質を感情と直觀(Sentieren und Anschauen)によつて把捉せんと企圖してゐた。

之等の先達者の中にて、デイルタイの方法の發達に對して重要なる影響を與へたのは、シユライエルマツヘルである。氏の直觀は宗教的經驗である。宗教的經驗は世界の眞の根柢にして、それ神への絕對の歸依の感情(feeling of Schlechthinniger Abhängigkeit)中に於ける思惟と存在との統一である。直觀はかゝる經驗を不完全に記述するから、氏はこの直觀なる語を捨てゝ、その代りに感情なる語を使つた。デイルタイはシユライエルマツヘルのこの感情の學說を「此學說は感情內に於ける神の直接の存在を誤つた抽象作用によつて、其中に共に働いて居る意志の事實及び前提としての神にまで導く所の思惟の過程を分離せしめた」と批判し、事實に於ては神の意識は、常に共に働く思惟作用に基づき、情趣の經驗より生ずるものなりとなした(Dilthey. Ges. Schr., Vol. IV. p. 395.)。この知的直觀はカントにありては、神の意識の統一の原理であり、フイヒテにあつては、純粹我の意識の統一となり、シエリング、ヘーゲルに於ては純粹理性の統一となり、ヘルデルリン及びシユライエルマツヘルに至りては、この抽象的思惟の統一は、一變して心的事實の經驗卽ち感情中に見出さるゝに至つた。デイルタイはこの問題を氏の心理學に於て、解決せんとした(十六)三三八—三三九頁。

精神科學の基礎を體驗內の精神世界に求めんとする點に於て、ディルタイは、ロック、ヒユーム、カント等の認識論學派と一致して居るが、しかし氏は意識の事實の關聯

(氏は哲學の全根柢をこの關聯に認めんとするものであるが)を之等の學派の試みたるものとは著しく異つた方法で把捉せんとした(So musste ich doch eben den Zusammenhang der Tatsachen des Bewusstseins, in dem wir gemeinsam das Ganze Fundament der Philosophie erkennen, anders fassen, als es diese Schule getan hat.)(四)XVIII頁。

ディルタイは精神科學の正當なる方法論は、一面的なる理性論者の偏見を超越し、確實なる全意識の事實の上に建設すべきものなりとなし、遂に「生命をば生命自體より體認せんと欲す」(Das Leben aus ihm selber verstehen zu wollen.)(五)四頁、と發願するに至つた。生命の認識を思惟によらず、生命自體より體認せんとする氏のこの發願は、氏の心理學的意識の方法論的根本理念である。氏は自ら之を氏の哲學的思惟の顯著なる衝動(der herrschende Impuls in meinem philosophischen Denken)とさへ呼んで居る(五)四頁。

生命の體認を生命自體から爲さんとするに當りて、最重要なる條件は生命を體認せんとする認識主觀の性質である。ヘルデル、ウィルヘルム・ホン・フンボルト等の見解を省きては、經驗論的認識論者もカントと共に、經驗及び認識を表象に屬する事實から說明し、之等の認識論者の認識主觀は表象のみから構成せられて居た。之を以て氏はロック、ヒューム、カントの認識主觀を批判して「彼等の主觀の血管內には生き

た血は流れてゐないで、單なる思惟活動としての理性の稀薄な液汁があるのみである」と叙べたのは(四)XVIII頁、既に熟知のことである(四)XVIII頁。

本來人間は單一に思惟するのみのものにあらず、又單に感激するのみの者でもない。思惟すると共に感激し、感激すると共に意欲し、意欲すると共に行動する生動體である。然るにデカルトを始め、ロック、ヒューム、カント等の合理論者は人間性の一面を高潮し、主智的心理學は表象又は感覺を以て、一切の精神生活の根柢とした。ヘルデル、フンボルト、ゲェーテは人間性の全般的方面に視線を轉じ、就中ゲェーテの知・情・意の諸方向への圓滿なる調和的發達は、全人間性の正しき解釋に對して、指示せる所が尠くなかつた。ディルタイは之等の人々の見解に立脚し、哲學・歷史・文藝の世界に於ける顯著なる人々の人間性を歷史的・心理學的に研究し(十七)九頁、遂に人間性の本質を「意欲し、感激し、表象するもの」(wollend fühlend vorstellende Wesen)なりとの結論に到達し、氏は之を以て認識主觀の眞の本質なりとなした(四)XVIII頁。ディルタイの心理學の具體的方法は、この結論より發生する。心理學の具體的方法立案の根柢として、最重要なる條件は、人間性一般に關する豫感又は豫想である。この豫想の一面的なるか、又は非事實的なる時は、かゝる豫想の上に建設せられたる心理學的方法は、常に偏見

的又は局部的或は架空的となる。過去の形而上學的、自然科學的、主智的心理學は、實にこの消息を事實として物語るものである。

ディルタイは氏の心理學的認識の發足に於て、一切の形而上學的假定を排し、(十八)一二頁、人間性一般及び認識主觀の本質に關する一面觀を退け、合理的認識論者の認識主觀の表象的要素に代ふるに、全人間性(die ganze Menschennatur)(四)XVIII頁、卽ち精神生活の全體性(die Totalität des Seelenlebens)(十八)一〇頁、を以てし、認識・外界・時間・實體・原因等の諸概念を初め、その他一切の者をこの全人間性より說明し得るものなりとなした(Sie alle können aus dieser ganzen Menschennatur erklärt werden)(四)XVIII頁。ディルタイが精神世界就中歷史の世界の探求に、氏の中心的興味を覺えながら(十八)一〇頁、(十七)五頁、他方人間の研究(das Studium des Menschen)に氏の生涯の事業の一半を割愛せしは(五)四頁、人間性の研究が上に述べたる意義に於て精神科學の基礎たらざるべからざる爲めであつた。されば氏は一八八七年アカデミーに於ける最初の講演(十八)に於て、「個々の科學の基礎を人間性に立脚すべきを說き、哲學的世紀は生命を人間性の一般妥當的抽象的學說から(aus einer allgemeingültigen, abstrakten Theorie von der Menschennatur)改造せんと欲すと云ひ、現世紀の任務は、歷史的發展史に於ける偉大なる直觀を、十八世紀の眞理によつ

て精練し、生命に對して意味深き、明晰なる概念に形成するにありと宣言し、この任務を果すには、精細なる心理學的方法と概念とを必要とする。而して特に重要なるは、人の知的活動を始め人間のあらゆる活動に於て、精神生活の全體性、意欲し、感激し、表象する全人の活動を證明すべきである(besonders aber muss in allen Leistungen des Menschen, auch in denen der Intelligenz, die Totalität des Seelenlebens, das Wirken des ganzen, wollend-fühlend-vorstellenden Menschen nachgewiesen werden.)(十八)一一頁、と主張し、全人活動、全人間性を以て、氏の認識主觀の核心となした。(續く)

參考書

一、Frischeisen-Köhler, M. Wilhelm Dilthey als Philosoph. Logos. III Band. 1912.

二、Tumarkin, A. Prolegomena zu einer wissenschaftlichen Psychologie. 1923.

三、文學士勝部謙造氏　ディルタイの哲學　大正十三年(一九二四)

四、Dilthey, W. Einleitung in die Geisteswissenschaften. 1883. Gesammelte Schriften. I. Band.

五、Dilthey, W. Vorrede. 1911. Gesammelte Schriften. V. Band.

六、Dilthey, W. Ueber die Möglichkeit einer allgemeingültigen Pädagogischen Wissenschaft. 1888. Gesammelte Schriften. VI. Band.

七、 Dilthey, W. Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie. 1894. Gesammelte Schriften. V. Band.

八、 Goethes Fanst. Heransgegeben von Georg Witkowski. Erster Band. 1920.

九、 Maeterlinck, M. Wisdom and Destiny. translated by Arfred Sutro.

十、 Dilthey, W. Beiträge zur Lösung der Frage vom Ursprung unseres Glanbens an die Realität der Anssenwelt und seinem Recht. 1890. Gesammelte Schriften. V. Band.

十一、 Dilthey, W. Das Problem der Religion. 1911. Gesammelte Schriften. VI. Band.

十二、 Krueger, F. Der Strukturbegriff in der Psychologie. 1824.

十三、 Simmel, G. Goethe. Fünfte Auflage. 1923.

十四、 拙著、ディルタイの「精神生活の Struktur」の意義に就て、倫理教育研究 大正十四年一月及び七月號

十五、 Dilthey, W. Das Erlebnis und die Dichtung. Achte Aufl. 1922.

十六、 Tapper, B, Dilthey's Methodology of the Geisteswissenschaften. the philosophical Review. Vol. XXXIV. 4. 1925.

十七、 Dilthey, W. Rede zum 70. Geburtstag. 1903. Gesammelte Schriften. V. Band. 1924.

十八、 Dilthey, W. Antrittsrede in der Akademie der Wissenschaften, 1887. Ges. Schr. V. Band. 1924.